

本山彦一と大阪毎日新聞の学術研究調査支援

山口 卓也

関西大学博物館学芸員

本山彦一と大阪毎日新聞社は、新聞社直営の社会公益事業として、さまざまな学術研究調査を実施し、さらに各団体や研究者個人の学術研究調査、教育機関へも支援した。私企業として大阪毎日新聞社の負担は巨額であったが、この大正期から本山彦一逝去までの昭和初期に行われた学術研究調査や支援は、日本の科学的、学術的な基盤を明らかに底上げする効果があったし、また関西圏、大阪への貢献にも大変大きいものがあった。

大阪毎日新聞の社会公益事業・学術研究調査支援

大阪毎日新聞は、大正2年から始まる日本環海流調査などを契機として、1916（大正5）年以降、本社利益から基金の積み立てをおこない、そこから学術研究、教育、慈善、公民教化、その他の公益事業を実施または援助する形が作られた。昭和7年の本山彦一逝去までの間に、この積立金から支出された金額は47万円あまりに達する。他に大阪毎日新聞慈善団など直営事業、大大阪記念博覧会やこども博覧会開催への出資があったなど、社会公益事業・学術研究調査支援には毎年巨額の出費があったという（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 387）。これらすべてを合わせると、今日の企業メセナの概念を超える、私企業に稀な「利他行為」そのものであった。47万円の内訳は、学術研究調査8万6547円、教育奨励5万7003円、災害救恤5万4000円、産業奨励1万1万9200円、社会事業11万7178円、運動奨励2万8904円、芸術奨励1万9213円、国際親善6万3464円、各種記念事業で2万7447円であった。

別途「東宮御成婚奉祝記念事業」として、帝国学士院に「大毎」「東日」賞として毎年4名に4千円を授与する基金など10万円の寄贈、大阪市への大音楽堂寄贈、北樺太探検隊派遣、全国分県地図の発行なども行っている（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 376-378）。

学術研究調査の支援では、学問的専門的分野で偏することなく、社会的・学術的要請を考慮して広い見地から援助した。

『学』に対する君（本山彦一）の限界が広く、且公平でなければ到底出来なかったことと思ふ。私はそこに、本山君その人の大きな常識を見る」との京都帝国大学総長荒木寅三郎の追懷（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 508）がある。

大阪毎日新聞という「公器」を使つての、環海海流調査や高層気象観測所設置などは、社会的国民的大局的な視点での直営の研究活動や支援を行った分野である。一方で、先史考古学や人類学、昆虫学・植物学などの本山個人の嗜好する分野には、私的な経験と関心に連なるテーマでの研究活動支援があったことがわかる。

日本環海海流調査

大阪毎日新聞は、本山彦一の発案によって、1913（大正2）年5月大阪毎日新聞1万1千号記念事業として4年間にわたって日本環海海流調査を行った。この海流調査は、四方を海に囲まれた日本列島にとって、船舶の航海や水産事業、農業収穫の豊凶など幅広い分野で影響が大きいことから、周辺の海流が日本の人文に大きな影響があったであろうことに根差して実施された。

海流調査は海洋研究の一部門であり、潮の満ち引き、水蒸気と降雨、気象変動、塩分分布や水温、生物資源など多くの分野と密接に関係していて、これらの調査と相まって研究する必要がある。当時は海軍水路部、水産局、専門学校など個別の機関、研究組織が当面の必要のため部分的に行っていた調査を、新聞社の事業として取り上げ、新聞の機能を使って確実かつより広範囲に行おうとしたものであった。

1913（大正2）年から5か年で1万3357本のビール瓶が、北緯48度以南統計148度以西の全国沿岸並びに日本海、渤海、黄海、東シナ海、南はルソン沖の範囲で投下され、このうちの2970本が回収されて、日本列島環海海流の詳細が調査され（熊田1923）、大阪毎日新聞、東京日日新聞に報告が掲載された。

この海流調査は実施に際して、広く大阪毎日新聞と東京日日新聞紙面で告知され、漂着ビール瓶を発見した際、内部の葉書を投函すれば20銭の礼金がもらえることから、海岸探索の一大ブームが起きたという。

本研究の目的は個別の研究成果を紹介することが目的ではないので、この調査の詳細を紹介しないが、この研究は、さかのぼって古代民族の移動とその分布、及び他国との交通状態を知るうえでも必要であり、本山個人の関心事であった先史考古学の研究とも密接の関係があるようにもみえる

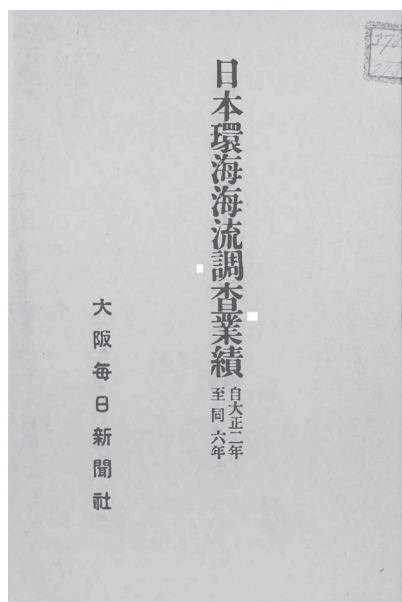


図1 表紙日本環海海流調査業績

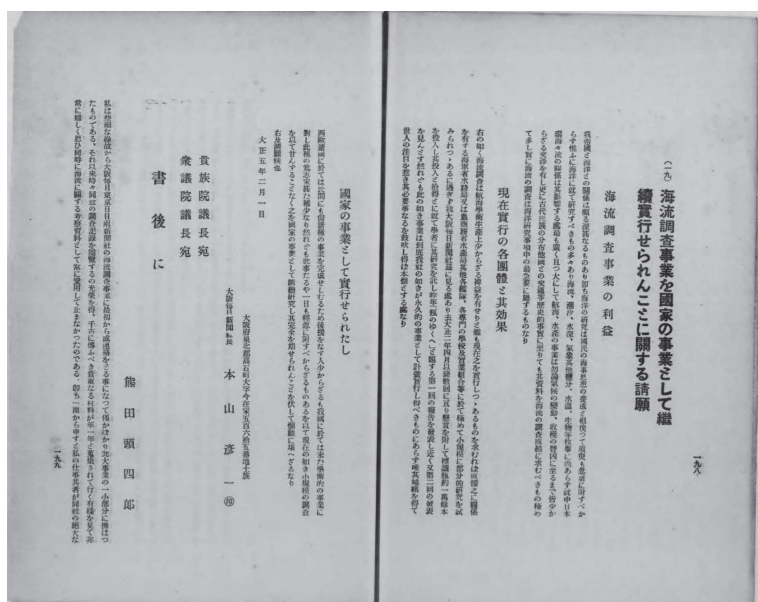


図2 請願書

(故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 509)。大阪毎日新聞社が行った学術研究調査には、本山彦一の関心も大きくかかわっていることが知れる。

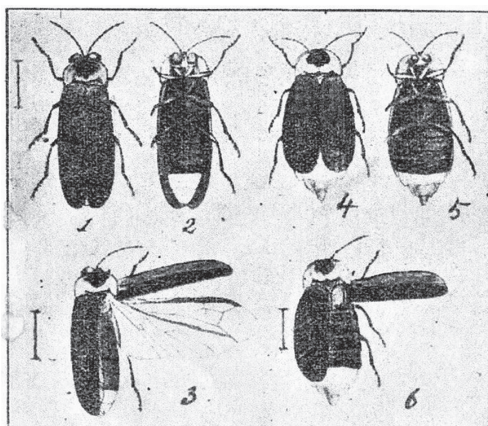
日本環海海流調査での成果と科学的調査の必要性の社会への啓蒙で、大阪毎日新聞が貢献したことを喜んだ本山であったが、このような根源的継続的な調査研究は、今後国家的な事業として専門的調査をすべきとして、1916（大正 5）年に貴衆両院に請願し、1918（大正 7）年 8 月に事業を政府組織に引き渡した。

高層気象観測の施設設置

まだ気象レーダーやラジオゾンデ気球などのない大正期、本山彦一は、各県知事や気象学者の提言を要れて、気象観測のための高層気象観測が飛行機の運行、天気予報、登山の安全のため必須であると考え、大阪毎日新聞社をもって民間からの支援をはじめた。調査行の際に新種蛭を発見するというエピソードも残る。

1917（大正 6）年に滋賀県知事の伊吹山に高層気象観測所設立が必要であるとの要請を受けて、大阪毎日新聞社が設置費の大半の 4000 円を寄付援助して、1919（大正 8）年に完成、富山県立山にも富山県知事の提案で 2500 円を寄付して大正 9 年に完成し、ついで五色ヶ原と黒部平などに避難小屋を建てている。1924（大正 13）年には、豪雨地帯にある和歌山県大台ヶ原の海拔 1515 m の雨量観測所から山麓までの約 20 km の私設電話架設費用 4500 円を寄付援助して、円滑な出水警報発令に役立てられた。その他、雲仙岳山頂の高層気象観測所建設・設備費として 1 万 5000 円、高千穂英彦山高山観測所建物建築の半額などを大阪毎日新聞社から寄付している。

本山と大阪毎日新聞は、これら支援を行うとともに気象観測施設の設置充実の重要性を社会に認知させる努力を続けたが、海流調査と同様に国家経営で行うべきとして 1922（大正 11）年 3 月に貴衆院両院に「気象観測所の完備増設を国家事業として実行せらんとすることに関する」請願を提出し、国の観測体制整備に道を開いた。



面背雄 4) 狀の翅開上同(3) 面腹上同(2) 面背雄(1)
狀の翅開上同(6) 面腹上同(5)

図 3 伊吹蛭



リ ア = 北西丁四約 リ = 所留停田三 像銅爵男鬼九 = 併館物博田三

図 4 三田博物館

幅広い学術研究調査支援

大阪毎日新聞社が海流調査や高層気象観測所など直営で行う学術研究調査やその支援事業のほか、大学や大学の教室、大学教員、研究者個人にも研究費や研究所などの開設費用を支援することが行われた。

ギフチョウを発見した昆虫学者の名和靖が名和昆虫研究所を発展させて、1917（大正 8）年名和昆虫博物館の設立する際に支援した。同年に本山彦一が伊吹山の高層気象観測所視察の際に発見した「伊吹蛭」の鑑定を名和昆虫研究所に依頼した経緯がある。南紀の博物学・植物学者南方熊楠のために、研究の拠点として 1919（大正 10）年に発起された南方植物研究所には、『大阪毎日新聞』で「新設されたる南方植物研究所」の見出しでその有用性を連載（1919（大正 10）年 9 月 13 日～17 日付）し、社長の本山彦一も発起人として 5000 円の基金拠出をしている。慶應義塾からの知古の間であった九鬼隆一が設立した三田博物館に、関東大震災後、建物保全と防火施設設置のため、三田町長を迂回して支援を行っている。

大学関係では、京都帝国大学には昆虫学・日本刀・物理学・湖沼学・考古学などの研究、東京帝国大学には魚類分布・人類学の研究、東北帝国大学には植物学の研究、九州帝国大学には稀有鉱物・コンクリートの研究、愛知医科大学には血液の研究、宮城帝国大学には漢薬研究を支援した。

京都帝国大学の考古学は、考古学教室の濱田耕作教授への支援、一方東京帝国大学の人類学は、医科大学の小金井良精教授や理科大学の鳥居龍蔵助教授らへの支援であろう。1917（大正 6）年からの河内国府遺跡発掘では、発掘地の調査権を本山彦一が一括して購入し、当時の人類学・考古学研究者の調査を招致したこと、道明寺天満宮の宿舎を手配したことが知られており、小金井と鳥居、両帝国大学などによる発掘が行われている。道明寺天満宮の記録では、ほとんどの発掘隊が寄宿したという。1930（昭和 5）年の京都帝国大学の筑前須玖遺跡の弥生時代甕棺墓調査でも、調査費用の大半を寄付したことが、島田貞彦の報告書序説で謝辞として記されている（島田 1930）。

鳥居龍蔵については、1917（大正 6）年、汽車中で本山と出会い、大阪毎日新聞に記事を依頼されたことから、近畿地方先史時代遺跡の踏査に結び付いたこと、国内海外を合わせいくつもの遺跡調査旅行を共にしたことなど、本山の考古学に大きな寄与があったことが知られる（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 2018）。1921（大正 10）年には、本山が鳥居宅敷地に蔵書を収める書庫一棟を送っている。1924（大正 13）年鳥居が東京帝国大学を離職して、鳥居人類学研究所設立した後も、その支援と交友は続いた。

その他は、東京日日新聞記者小野秀雄の新聞学研究、台湾博物館主事森丑之助の台湾蕃族研究、満州医科大学の北村直躬教授による人種生理学研究、大阪医科大学の北里闌教授による古代語研究、名古屋帝国大学医学部桐原眞一博士の血液型研究、梅原米治の玉虫研究、東京帝国大学農学部副手大町文衛博士の蜜蜂雌雄性的の研究などがある。玉虫については、本山彦一の考古学的史学的関心の一つであったので、昭和 7 年に京都帝国大学農学部山田保治学士の『古代美術工芸品に応用せられしタマムシに関する研究』が大阪毎日新聞社の資金で刊行されている。

最後に、教育奨励事で支援を受けた大学、専門学校などを紹介する。大阪医科大学、関西大学、

慶應義塾大学、早稲田大学、日本女子大学、日本大学専門部、東北学院、帝国女子専門学校、津田英学塾、日本国民高等学校、海外植民学校、皇典講読所、國學院大學、農村文化協会、懷徳堂、日本新聞学院、大阪昭和育英会、国土館などであった。

関西大学には、本山彦一と大阪毎日新聞社からの両方からの寄付が寄せられている。

本山彦一の学門的興味と学術研究調査の支援

日本環海海流や高層気象観測などは、大阪毎日新聞社が着手して、一定の成果があった後、国に事業を引き渡している。社会的な要請から新聞社事業としたものは、明確に事業として見切りがなされたように見える。一方、支援事業はこのような大規模な研究課題への支援と、研究組織・個人への継続的な支援の両方があったのではないかと観察できる。特に、考古学と人類学分野には、複数への支援が続けられており、特に鳥居龍蔵への長期にわたる支援などは、本山個人から発した「こだわり」と認めることができるであろう。

晩年には、本山は、大山柏公爵や小金井良精東京帝国大学教授らとモースの発掘した大森貝塚の記念碑、喜田貞吉、青森在住の研究者らとともに青森県是川遺跡の記念碑を建碑している。

晩年、本山が所属していた学術団体・学会のリスト（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 422-424）を見てみると、学術研究団体、学会なのか組織名では判断の付きにくいもの、収録漏れがあることも考えられるが、宗教研究會々員、天文同好會名譽會長、史學研究會々員、大阪史談會々員、東京地質學協會々員、考古學會々員、東京人類學會々員、三田史學會々員、東洋貨幣協會贊助員などが認められる（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 422）。

ここには、理系の天文学と地質学、人文系の宗教学と歴史学、当時学問的領域が未分化だった考古学と人類学の団体名がある。東京人類學會は、本山が大正元年に西都原古墳群の発掘を見学する以前の1903（明治36）年頃に入会しており、考古学・人類学への関心は、1877（明治10）年、大森貝塚発掘土器を上野の教育博物館で見学した時から継続していた。東洋貨幣は、本山が長く個人的に収集していたものであり、その探求のための所属であろうか。三田史学会は、福澤諭吉に師事したことで交流のあった慶應義塾大学の史学会であろう。

これらは、いずれも本山彦一の知的関心領域を示すものとみなせるが、本山の所属学術団体・学会と大阪毎日新聞社がおこなった支援分野とは完全には一致せず、広く理工学にまで及んでいたことを指摘したい。

本山の所属した学会の学門分野では、歴史系と考古学・人類学が存在感を示している。1923（大正12）年5月17日に「・・・若しそれ史学と考古学とに至りては、余の最も嗜好するところ、・・・」と挨拶が記録されているが、伝記p 528（故本山社長伝記編纂委員会 1937）では、「単に興味あるがために研究し、または研究のために



図5 道明寺天満宮に贈られた玦状耳飾

研究したものでなく、一の確固たる指導精神のもとに、斯学に対する趣味、研究を続べ、これによりて国家社会に貢献せんことを心がけていた」とも評されている。

本山彦一は、考古学・人類学の学会などに会員として所属し、この分野を中心に多様な研究調査の支援を行ったが、実は本山自身が研究自体を行ったり、研究論文を執筆、発表した痕跡は、今のところ発見できていない。報告書や論文中に、本山の巻頭あいさつ文が掲載されたものや、研究者調査者から本山への謝辞が認められるにとどまる。

昆虫学では、「伊吹蚩」も本山自身が発見したものであるが、学会への報告は、鑑定を依頼した松村松年博士が学名を付け、名和昆虫研究所が機関学会誌に発表している（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 549）。

同様の視点で、本山彦一の考古学三大発掘を見直してみると、本山彦一が発掘権を買い上げて、考古学・人類学者の発掘を招致した河内国府遺跡では、正式な発掘調査報告書は、京都帝国大学から刊行された第1回・第2回だけで、本山自身が発掘した部分の調査報告書刊行を意図した証拠はない。大正時代に論議された「日本人起源論争」にまつわる研究の成果は、国府遺跡発掘に参加した研究者個々が、自らの研究成果として論文などで公表することを促したにとどまる。本山が自ら発掘した遺物も、かなりの点数を京都帝国大学や道明寺天満宮に研究資料や「宝物」として寄贈している。

長府の和同開珎鑄銭司の発掘では、大量に出土した銭鑄型の破片のうち良品を黒川幸七らに譲るなどして、本山の手元に残って本山考古室に引き継がれたものは断片がほとんどとなっている。河内国府遺跡同様に極端な利他的な「標本分け」が行われたことが知れる。

学問的発見自体は大阪毎日新聞に速報されるものの、資料・遺物それ自体への「執着」の感じられない扱いとなっていることは、本山という人物を理解しようとしたとき、驚きですらある。京都帝国大学医学部清野謙次教授は、「本山さんは遺物所有欲が淡泊で（あるので、清野が論文に利用して）学会に報告（する）前に人に遣られるので困る（補足追加）。」と嘆じている（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 558）。大山柏侯爵は、本山を「翁の真意は決して発掘調査のみにかぎられたものではなく飽くまで考古学の勃興した源泉を糺すといふところに最後の目的があったやうに思はれます。」と洞察している（西村 1937）。

1917（大正6）年、本山彦一と鳥居龍蔵は、大阪毎日新聞の負担で近畿地方の先史時代遺跡の調査を行い、鳥居は近畿地方にも先史時代遺跡が多数存在することを「発見」する。この発見は、学術専門記者によって大阪毎日新聞に速報された（岩井 1917）。その研究成果の報告会を大阪毎日新聞社が主催して、大阪府浜寺で開催した。

その講演会で開会の辞を述べた本山は、

「（前略）私は考古学に興味を有する者にて一種の道楽

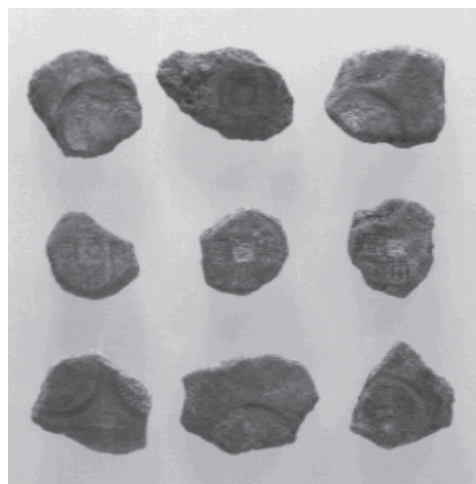


図6 和同開珎鑄型破片（本山コレクション）

とも申す可く、併し此道楽は骨董や茶の湯などと少し違ひまして多少学会に貢献する（こ）
とがあるやうに思ひます。固より専門の学者の如く敢て自ら其蘊奥を極めんとする積で
はありませぬ。道楽半分に研究採集したる物が専門学者の参考資料となる事を得ますれ
ば、我々の大いに満足する所であります。（一部改変）」

と、自らの考古学趣味と専門研究者の研究とを明確に区別して、あいさつしている（本山 1917）。
鳥居は、講演「畿内の石器時代について」で、本山彦一や大阪毎日新聞記者とともに廻った調査の成
果を報告した（鳥居 1917）。この講演会の記録は、人類学雑誌第 32 巻第 9 号に掲載されている。

本山のあいさつ文には、その研究調査の進捗、成果への賛辞と、本山の考える社会的かわりが
記されている。さまざまな社会への働きかけ、慈善団など改良運動を発起指揮する本山にとって、
成果として形となる段階では、会社経営にそれぞれ担当者を配するように、学術研究調査の分野も、
自らが制御して推進する、あくまで一つの分野にすぎないのであろう。達成した発見や進歩進捗自
体を楽しむこと、個々の資料や標本を愛でることと、それと対峙して、その成果をふさわしい研究
者が社会に還元したという達成感が、まったく本山自身の中で、区別することができていたことにな
る。学術研究調査の分野でも、プレイヤーではなく支援者として徹底しようとする姿勢が、生涯
一貫していた。その点は、考古学・人類学という自らの興味分野にあってすら、自らの名前で誇る
ことよりも、支援に徹したことでも視える。

本山と大阪毎日新聞社が採択した個々の支援事業や研究者支援に、意識的な優遇はなかったもの
と考えてよい。その姿勢があったからこそ、大阪毎日新聞社の会社経営とともに、本山彦一の学術
研究調査の支援が、長く続けられたのであろう。

参考文献

- 岩井武俊 1917 「紀和河泉諸国に於いてなせし事ども」『人類学雑誌』第 32 巻第 9 号 東京人類学会
熊田顕四郎 1923 『日本環海海流調査業績 自大正二年至同六年』大阪毎日新聞社
故本山社長伝記編纂委員会 1937 『松陰本山彦一翁』大阪毎日新聞社
島田貞彦 1930 『筑前須玖史前遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第 11 号 京都帝国大学
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 2018 『鳥居龍蔵 日本人の起源に迫る ―本山彦一との交流―』
鳥居龍蔵 1917 「畿内の石器時代に就いて」『人類学雑誌』第 32 巻第 9 号 東京人類学会
名和梅吉 1921 「伊吹蛭の調査概要」『学説』第 25 巻第 287 号
西村健吉 1932 『財団法人 富民協会十年史』財団法人富民協会
本山彦一 1917 「開会の辞」『人類学雑誌』第 32 巻第 9 号 東京人類学会



富民協會章